

令和2年度 第1回インクルーシブ教育（支援児包括教育）推進委員会 議事録

□開催日時：令和2年7月29日（火）14時～16時

□開催場所：駅北庁舎4階 災害対策本部

□出席者（敬称略）

- ・委員：宇野宏幸 中野正大 柴田勇夫 安藤克己 水野浩庫 高尾和督
岡英樹 渡邊早百合 深萱健次 長谷川邦代 加藤裕子
瀬瀬育恵 天野智恵子
- ・事務局：渡辺教育長 河本副教育長 高橋次長 松澤朗 松浦一信
小島章予 長谷川京子 石田光恵 後藤正樹

1 あいさつ

教育長あいさつ

2 自己紹介

3 委員長、副委員長選出

4 報告・検討内容

（1）インクルーシブ教育推進プランの変更について

事務局

基本施策5の「園と学校間の連携（追指導の実施）」を、今年度は「園と学校間の連携、および卒業後の諸機関との情報交流」に変更を考えている。ご意見や感想、質問をお伺いしたい。

委員

諸機関とは、どういったところを考えているのか。また、情報交流は先生が行うのか、保護者が行うのか。

事務局

諸機関は、卒業後の生活に関わる会社や支援センター等を想定している。情報交流は、まず先生が行うことを考えている。

委員

諸機関の例としては、相談支援センターがあり、東濃5市で基幹相談支援センターを立ち上げた。他には、障がい者向けの福祉サービス、医療関係、福祉課、就労先がある。情報交流が、就労先との懇談、就労先の担当者による講話といったように、具体的に何を行うことかを考えたい。その際、保護者の参加も検討するとよい。

委員

プランの変更により、卒業後まで子どもたちを見届けたいという印象がよく伝わってくる。

委員

中学校に勤務している立場では、進路選択には大きな関心がある。見通しをもった情報提供と社会に出た後にもサポートがあるということを、本人や保護者に伝えることも大切である。

委員

保護者との懇談の中では、目の前のことだけでなく将来のことを話題にすることが多い。そのためには、教師が情報を知っておくことは大切なことである。

委員

通級に通っている児童が、どのような進路選択をしているのか、特にLDの診断を受けていた児童が、どのような学校を選択し、就職をしていくのかを知りたい。

委員

2歳くらいから高校卒業までの子どもが受診をしている。分野によって能力に差がある子が多いが、能力を活かして働いている人もいたり、ジョブコーチがサポートをして企業に就職をしたりするケースもある。こういった事例を先生も知り、特性を活かして、どういった生活をしているのか、どういったことで困っているのかを知って、次の世代の人たちに活かすシステムを構築してほしい。一方で、支援を受けることができずに、家庭に引きこもってしまうケースもあることも承知してほしい。

委員

特性のある子どもが、社会に出るまでに、どのような支援を受けてきたかが大切。見通しをもった支援を行うことで、本人も保護者も安心できる。職員は目の前のことしか見えないので、先のことを知る機会が必要である。明るい見通しがもてる交流になってほしい。

委員

幼稚園・保育園と小学校間の情報交流は、頻繁に行われるようになってきた。小学校の入学後のことになると、子どもたちの生活の様子も分からないことが多い。また、どういった流れで社会に出て行くのかを知りたい。「将来を見据えて」と言われるが、保護者にも将来の話ができるようになると、信頼関係も深まっていくのではないか。

委員

将来を見据えて、進路選択をした方がいいと分かっているものの、その時のこと

で手一杯になってしまっている。施策に示されている「一貫した支援」が大切だと思う。担任の先生が替わるたびに、同じ説明を何度も行うことになったり、先生によって受け止め方が違ったりする。情報を積み重ねていくことが大切ではないかと思う。

委員

この先どうなっていくのか、どういうことがあるのかを知っていることが大切である。夢をもって、子どもも保護者も学校も一緒に成長していけるといいと思う。

<プラン変更の意図>

事務局

これまでの巡回相談やインクルーシブ教育推進委員会、就学等支援委員会において、将来を見据えた支援の重要性が話題になってきた。一方で、教職員は、卒業の後の生活に関しては十分な情報をもっていない。今年度は、特別支援教育コーディネーター研修会で企業の担当者を招き、会社での支援の実際や本人の生活ぶりを学ぶ機会を予定している。

委員

具体的に、活発に情報交換をすることを期待したい。子どもだけでなく、保護者自身も子どもが何歳になったら、保護者が何歳になって、どんな生活を送っているかを考えたい。その年代ごとに、どんな福祉サービスがあり、どんな暮らしをしているのかを具体的に提示すると分かりやすいのではないか。

副委員長

諸機関との連携は、当初から強調されていたことであるが、実際には課題が残っている。中心となる組織が必ずしも存在をしないことが影響していると思われる。今回提案のあったように、福祉作業所から一般企業まで広い部分をカバーすることは、なかなか見られないため、多治見市居住者のためのサポート体制を一元化できるとよいのではないか。いかにチャンスを広げるか、就労後に新しいことにチャレンジしようとしたときに、どのようなサポートを受けることができるのかを考えることができるとうい。

(2) 各プランの進捗状況について

<デジタル教科書について>

委員

デジタル教科書を使用する条件はあるか。

事務局

希望制となっている。特別支援学級や通級指導教室に在籍する児童生徒だけでなく、通常学級の児童生徒も使用している。今年は、外国籍児童生徒支援員の勧めもあつ

て、外国にルーツのある児童生徒も多く使用している。

委員

保護者にデジタル教科書があるということを話題にしたが、保護者からは学校では使っていないという返事があった。また、学校でしか使えないという事例もあった。

事務局

改めてデジタル教科書の使用については周知していきたい。貸し出しについては、学校ごとの事情もあるため、一律に対応できるというわけではない。

委員

特別支援学級の児童には有効であると思う。通級指導教室では、（教師が使う）指導書に振り仮名が振ってある文章がCDとなって付いている。これをプリントアウトして持ち帰ることで、家でも活用できる。

委員

振り仮名がついていたり、拡大をしたりすることで読むことはできるが、内容を理解しているのか。意味のある言葉のかたまりで読むことは行っているのか。

委員

読むことに抵抗がある児童にとっては、まず読めることを目指している。家でも読むことを継続することで抵抗が少なくなってくる。意味理解は、次の段階と考えている。通級に来たときに範読をしたり、保護者が意味のまとまりごとに線を入れたりして学習をサポートしている。

委員

本校でも10名ほどがタブレットにダウンロードして使用している。外国にルーツのある児童が使用したところ、振り仮名が振ってあるため、読むことのモチベーションが高まってきた。読むことに苦勞をしている子どもにとっては、有効な支援である。

委員

外国にルーツのある生徒を中心に使用をしている。通常学級の生徒にも使用を勧められているが、中学生は思春期であることもあり、周りの子が理解していても、本人が周りの生徒と違うと抵抗のある生徒が多い。様々な機能があるため、活用を促していきたい。

事務局

今年度から、デジター教科書を教育委員会でライセンスを取得し、各学校でも気軽に使うことができるようにした。その背景には、外国籍児童生徒支援員の働きかけ

があり、外国にルーツのある児童生徒だけでなく、読むことに困難さを抱えている児童生徒への活用につながった。

<中学校通級について>

委員

中学生は思春期であるため配慮は必要である。保護者としては、将来を考えると通ってほしいと思っても、子どもたちにとっては、将来のことよりも、今自分がどう見られているかを考えてしまうだろう。

委員

中学校通級に入級することで、高校入学へのハンディにならないかという保護者の不安がある。また、高校入学後も、本人の特性に配慮した授業を受けられるか。そういった学校があれば、生徒にも知らせてほしい。

事務局

通級指導教室に通うことで、本人の不利益にならないように配慮をする。また、高校入学後については、個別の教育支援計画等で支援を引き継ぐようにする。高校での支援については、情報を集め、提供をしていきたい。

委員

指導形態については、他校で指導を受けるとなると、移動時間もかかってしまうため、自校で指導を受けられることが望ましい。

<コーディネーター研の取り組みについて>

委員

特別支援教育コーディネーター研修会に参加をしている。隣接校種だけでなく、幼稚園・保育園の先生も中学校の学習や生活を知ることの重要性が話題になった。幼稚園・保育園の先生は、卒園後の様子を知りたいと思っている。逆に、中学校や小学校の先生は幼稚園・保育園の時の様子を知りたい。幼稚園・保育園は遊びを通じて学んでいくが、小学校からは学習になっていく。そういった違いも知っておく必要がある。

委員

幼稚園から小学校に入学するにあたって、支援シートを作成し、引継ぎを行っている。しかし、小学校に入学すると、状況が変わることもある。実際に学習や生活の様子を見ることで、「こういったところで抵抗を感じるんだな」と把握することができる。就学後のことを知ることは、保護者の安心にもつながる。

委員

副園長が特別支援教育コーディネーター研修会に参加をしているが、さっそく他園

・学校の先生と連絡を取り合っている。こういった取り組みで、連携が深まってほしいと願っている。

<外国にルーツのある児童生徒について>

委員

保護者も、日本の教育システムを知らないケースも多いように感じる。子どもだけでなく、保護者にも学校のシステム等を丁寧に説明する必要がある。

<全体に関わって>

委員

子どもたちの中には、先生と関係を作れず、不安定になる場合がある。専門性を高めるために特別支援教育に係わる研修は、さらに充実させてほしい。

委員

幼稚園・保育園で目指す姿と小学校での認識のとらえ方に違いが生じないように、特別支援教育コーディネーターの先生を中心に、活動の意味を話し合えるような機会を設けてほしい。

副委員長

デジタル教科書については、近い将来タブレットで使うことが当たり前の中が来ると思われる。更なる活用を期待したい。

5 次回予定

12月を予定

6 あいさつ